

# 新潟長岡「斯道館資料」の往来物について

## Investigation report on "OURAIMONO" documents of Nagaoka City Library possession： A study of documents transmitted to SIDOUKAN

郡 千寿子\*

Chizuko KOHRI\*

### 要 旨

新潟県の長岡市は戦時中の空襲火災により、長岡駅近くの中心市街地とその周辺は全滅に近い被害を受けたため、古い文献資料は残存していないと推測されたが、今回の調査で資料保存の一端を明らかにすることができた。北陸地域における往来物資料の存在意義を考えるうえにおいて、富山県立公文書館や高岡市立中央図書館の調査結果に加えて、基盤となりうる調査の一報である。長岡市立中央図書館文書資料室所蔵の目録を調査し、「往来物」に分類できる該当資料を選別した。その結果、「古志郡浦瀬村斯道館資料」に7本、「横山家文書」に10本、計17本の近世期版本の往来物資料が所在していることを確認した。「古志郡浦瀬村斯道館資料」の該当資料は、文書資料室が、2004（平成16）年10月23日に発生した新潟中越大震災で被災した「歴史的資料の救済」「震災関連資料の収集」という震災対応業務の活動によって収集保存された資料の一部である。本稿では、「古志郡浦瀬村斯道館資料」の該当資料7本について書誌を含めて報告する。目的別の分類では、教訓科往来が1本、消息科往来が3本、歴史科往来が1本、産業科往来が2本という結果であった。また出版地別の分類では、7本すべてが江戸の出版であることを確認した。

キーワード：新潟、長岡、往来物、被災資料、言語生活、文化交流、

### 1. 研究の背景について

近世期以降に出版された往来物資料を通して、実生活にどのようにそれらの文献資料が関わっていたのかの具体像を探ることを目的に研究<sup>1)</sup>をすすめている。往来物は、寺子屋などで手習いのために使用された教科書の類の総称であるが、近世期には様々な種類のもので出版された。従来の往来物研究は、教育史資料という側面からなされてきたが、日本社会の近代化や人間文化形成に果たした役割や影響など、多くの未開拓課題が残存し、新たな視点からの活用が期待されている。

しかし、文献資料の基礎的研究をはじめとして、発掘も十分にすすんでいない現状にあり、そうした事情を背景に、東北地域の往来物資料についての調査研究<sup>2)</sup>をすすめてきた。現在、東北地域と海域でつながり、近世期に関西とも文化交流など関係が深かったと予測される、北陸地域にも調査対象を拡げている。地域間

格差や文化伝播事情など研究の進展を目指し、富山地域における、富山県立公文書館と高岡市立中央図書館の調査報告<sup>3)</sup>に加えて、新潟県の長岡市立中央図書館文書資料室所蔵の「横山家文書」の調査結果をすでに公表<sup>4)</sup>した。本稿では新たに「古志郡浦瀬村斯道館資料」について報告する。

### 2. 長岡市立中央図書館と所蔵資料について

長岡市立中央図書館の文書資料室は、郷土の歴史資料を未来に伝えるため、地域の古文書や関係する図書・歴史公文書などを収集・保存している。新潟県の長岡市は、戦時中の空襲火災により、古い文献資料は残存していないと推測されたが、今回の調査で資料保存の一端を明らかにすることができた。

この背景には、2004（平成16）年10月23日に発生した新潟中越大震災による被害への対応が関係している。震災による被害は人的なものだけではなく、地域

\*弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

の歴史文化的な遺物や文献資料にも広くおよんでいた。

震災時、長岡市立中央図書館では、1995（平成7）年に発生した阪神・淡路大震災での教訓を踏まえて、「歴史的資料の救済」「震災関連資料の収集」という震災対応業務の活動を開始したのであった。その後も、被災資料の保存だけでなく、順次、整理や活用へと活動が継続されている。

長岡市立中央図書館文書資料室編『長岡市史双書 No48 新潟県中越大地震と資料保存(1)』<sup>5)</sup>によれば、文書資料室が受贈した被災資料は、「古志郡栖吉村室橋家文書」（栖吉地区）の103点、「刈羽郡法末村大橋家蔵書」（小国地区）の20点、「三島郡飯塚村廣川家文書」（越路地区）の123点、「古志郡浦瀬村林家文書」（山本地区）の141点、「三島郡三島町上岩井安達家文書」（三島地区）の5,376点、「古志郡富曾亀村亀貝西山家文書」（富曾亀地区）の230点等、38資料群で合計点数は19,095点にのぼる。

受託した被災資料は、「敦賀屋漆器店岸家文書」（表町地区）の185点、「古志郡三之宮村佐藤家文書」（下川西地区）の2174点、「古志郡浦瀬村樋口家文書」（山本地区）の1744点、「古志郡新町村長福寺文書」（新町地区）の11点、「乙吉公民館文書」（山本地区）の1,932点といった5資料群で合計点数6,046点である。

本稿では、「古志郡浦瀬村斯道館資料目録」（長岡市立中央図書館文書資料室、平成21年3月25日）を参考に往来物資料を選別し、紹介するが、これは上記の受託被災資料「古志郡浦瀬村樋口家文書」（山本地区）1744点の中に含まれる資料群である。

本来、被災によって破棄されたであろう文献資料群が、長岡市中央図書館の震災対応業務活動によって救済され、収集保存と調査と整理が実施されたのであるが、誤解を恐れずにいえば、震災がなければ、発掘や調査が実施される機会がなかったかもしれない資料群であった。こうした一連の活動と資料調査の過程は、震災の影響を物語るものとして、歴史的な意義があり、また古い文献資料の保存とその価値を考える上にも重要な文化事業であると思われる。

こうした文献資料の資料的価値について検討し、明らかにすることが、我々研究者という立場からの使命でもあるだろう。今回、その有益性の一面を紹介するが、地域に残存する文献資料は、教育的な基盤や言語生活の背景を示してくれる貴重な文化資源といえるのである。

東北地域における所蔵往来物の調査にならぬ、原則

として、写本は除き、版本に限って成立時期や出版元を確認した。調査対象の資料それぞれについて、目的別と出版地別に分類整理<sup>6)</sup>して、地域ごとの特徴について今後考察検討したいと思うが、写本を除いたのには意味がある。本研究の大きな目的のひとつは、地方における近世期の庶民生活について、出版文化を通して考えてみることである。写本は、その資料の内容を知るには重要な資料であるが、どこでどのような文献が出版され、それがどのような場所で使われてきたか、文化や教育の流通状況<sup>7)</sup>を解明するためには、版本の方がより大きな資料的価値をもつと考えたからである。

基本的には、従来の調査手法を踏襲し、近世期の往来物資料を厳選し、分類整理を試みた。目録等を参考にしつつ、現物資料調査において版本であるか写本であるかの確認と、文献資料の記載内容について『国書総目録』<sup>8)</sup>および『古典籍総合目録』<sup>9)</sup>で確認しつつ、調査を試みた。

研究対象となりうる該当資料として、「古志郡浦瀬村斯道館資料」に7本、「横山家文書」に10本の往来物資料の存在を確認し、現物調査を実施したが、本稿では「古志郡浦瀬村斯道館資料」の往来物資料に限定し、書誌情報と合わせて一部画像を提示して紹介したい。

### 3. 古志郡浦瀬村斯道館と該当資料について

「古志郡浦瀬村斯道館資料」は、浦瀬村の私立斯道館の館主目崎精松家<sup>10)</sup>の資料で、新潟中越大地震で被災し、取り壊すことになった旧家屋（斯道館跡地）の屋根裏に保管されていたものである。斯道館の蔵書だけでなく、寄託者の曾祖父土田松次郎、祖父目崎精松、精松の長男精一、娘婿の土田久吾らの蔵書も含まれる。目崎精松は、1863（文久3）年に浦瀬村に生まれ、小学校教師を務める傍ら、各赴任地で夜学を開設し、1897（明治30）年に新潟県より設立認可を受け、私立斯道館を小千谷町（小千谷市）に開校した。

その後、1906（明治39）年に故郷の浦瀬村に斯道館を移転するが、創設以来の入学者数は、1912（明治45）年4月時点で、男子780名、女子76名、計856名であった。当初、授業は和漢学と数学で修業年数は4年、本科と予科、夜学があり、複数の教員がいたという。蔵書については、「明治三十二年改 書籍目録」によれば、1,072点の掲載がある。

本稿では、「古志郡浦瀬村斯道館資料」の中から、近世期の版本の往来物資料に該当する資料を抽出して

調査を実施した。往来物と分類できる版本は、以下に紹介する7本であった。写本では、『近道童子往来』といった教訓科往来資料、『名物尽』といった語彙科往来資料も存在した。『近道童子往来』は最終丁部分に「土田銀治郎」と所有者（書写者の可能性もある）の氏名の記載が確認でき、実際に使用された痕跡がうかがえる資料でもあった。

版本は以下に紹介する7本だが、写本の存在を合わせて考えると、目的別にみると幅広い分野の往来物資料が所蔵されていることが知られるのであった。

#### ①増補庭訓往来 全一冊

〈資料番号〉98

〈表紙〉紺色 日焼け色落ちし「斯道館図書 第九九六号全一冊」と整理題箋有。

〈形状〉横18.0cm 縦26.5cm

〈丁数〉全54丁（目次3丁分含む）

〈出版〉江戸

〈分類〉消息科往来



①『増補庭訓往来』（表紙・1丁裏2丁表）

「奥書」55丁目裏表紙の裏部分に「天明龍集壬寅夏六月穀旦 以西村屋傳兵衛旧板 御江戸馬喰町二丁目東角 書林 永壽堂 西村屋興八再刊」とあり、江戸

の出版として分類した。「庭訓往来」は、最も代表的な消息科往来であるが、「増補」と付された本資料もその異種本のひとつであろう。刊本はほとんど大本で、近世より近代初頭にかけて約300種あるといわれ、中世から明治に至るまで最も普及した往来物のひとつである。次に紹介する『訓点読法 庭訓往来証注大成』という、「庭訓往来」の注釈書と共に所蔵されている点が注目される。

#### ②訓点読法 庭訓往来証注大成 全一冊

〈資料番号〉99

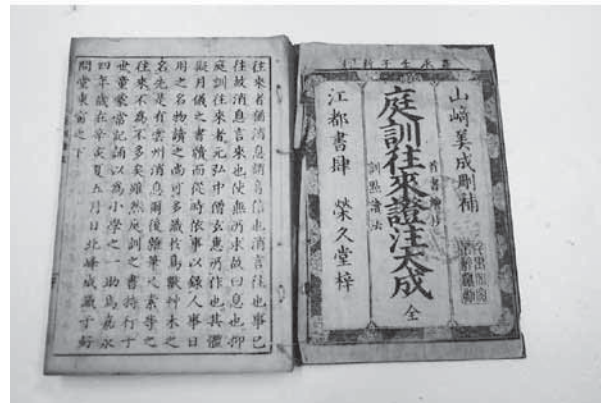
〈表紙〉紺色 綴紐欠損 題箋あり「斯道館図書 第一〇六九号全一冊」と整理題箋有。

〈形状〉横17.6cm 縦25.0cm

〈丁数〉全87丁（頁数記載86丁）

〈出版〉江戸

〈分類〉消息科往来



②『訓点読法庭訓往来証注大成』（表紙・表紙裏1丁表）

表紙裏に「山崎美成口補 庭訓往来証注大成」、右に小さく「首書絵抄」、左に「訓点読法」「江都書肆 栄久堂梓」とある。『国書総目録 第5巻』（783頁）に記載されている「庭訓往来証注大成」は、「一冊」、角書「訓点読法」、種類は「往来物」で、著者は「永井如瓶子編、山崎美成補」、成立は「嘉永四年刊」と

あり、本資料もこれに該当する。ただし、版本の所蔵先としては、「国会・内閣・静嘉・国学院・桜山」の5か所となっている。『古典籍総合目録』によれば、「嘉永四年版」が日大他2か所、その他として3か所の所蔵が記載されている。いずれにせよ、本資料は未紹介資料であり、貴重であるものと思われる。

③ 泉寶庭訓往来鳳庫 全一冊

〈資料番号〉155

〈表紙〉赤茶色 題箋あり。

〈形状〉横17.0cm 縦25.0cm

〈丁数〉全54丁 頁数記載も「五十四」角題「庭訓」

〈出版〉不明

〈分類〉消息科往来



③ 『泉寶庭訓往来鳳庫』(表紙・54丁裏)

「題箋」の中央に「甘泉堂蔵 泉寶庭訓往来鳳庫全」とあり、その題名の右横に小さく「改正」、左に「大字」とある。「奥書」はなく出版地は不明である。『国書総目録』『古典籍総合目録』にも記載のない資料であるが、広く普及した「庭訓往来」の異種本のひとつと思われる。

④ 証註実語教童子教 全一冊

〈資料番号〉157

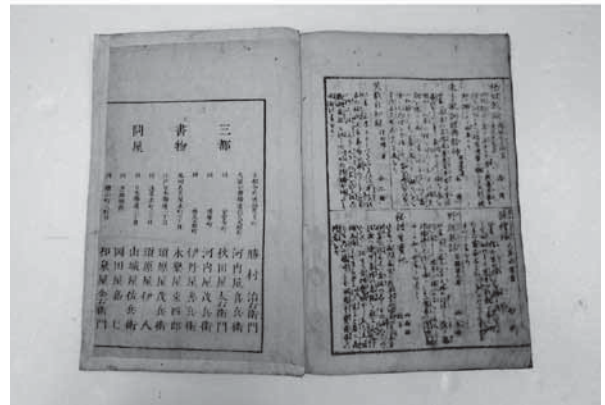
〈表紙〉確認できない

〈形状〉横17.8cm 縦25.4cm

〈丁数〉全59丁

〈出版〉江戸

〈分類〉教訓科往来



④ 証註実語教童子教 (表紙裏1丁表・59丁裏)

『国書総目録 第4巻』(124頁)に「実語教童子教証註」とあり、『往来物解題辞典』<sup>5)</sup>(329頁)の「実語教童子教証註」にも、異称として「(証註)実語教童子教」とある。当時の児童向けの代表的な教訓書「実語教童子教」の注釈書である。別々に作成された「実語教」と「童子教」が室町前期頃に合冊されたといわれるが、合冊本の教訓書が普及するなかで注釈書も作成されたのであろう。

本資料と『国書総目録』の題名は相違しているが、同種の資料と解される。『国書総目録』では刊行が明記されおり、著者名は「猪刈貞居(振鷺亭)」とある。本資料は、1丁表に「江都 振鷺亭貞居 著」とあるため、同じ人物を指すと考えられる。表紙は補強され、白紙がかぶせてあるため表紙を確認できない。題箋があるように見受けられる。全59丁で内題(表紙

裏)に「證註実語教童子教」とある。59丁表に「玉巖堂蔵版目録 東都両国横山三丁目 和泉屋金右衛門」とあり、出版元は江戸と推定できる。裏表紙裏部分「三都書物問屋」として、11軒が列挙されている。三都とあるが、「尾州名古屋」も含まれている。「京都寺町通松原下町 勝村治右衛門、大阪心斎橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛、同 安堂町 秋田屋太右衛門、同 博労町 河内屋茂兵衛、同 南久太郎町 伊丹屋善兵衛、尾州名古屋本町七丁目 永楽屋東四郎、江戸日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛、同 朝草茅町二丁目 須原屋伊八、同 日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛、同 芝神明前 岡田屋嘉七、同 横山町三丁目 和泉屋金右衛門」。

#### ⑤一夕話古状揃 全一冊

〈資料番号〉158

〈表紙〉赤茶色 破損激しい

〈形状〉横11.4cm 縦17.6cm 懐中版

〈丁数〉全57丁

〈出版〉江戸

〈分類〉歴史科往来



⑤『一夕話古状揃』(表紙・57丁裏)

角書に「一夕話曾」とあり、57丁裏に「注釈 北江老漁」「書画 ○今川状○手習状 歌川国直 ○腰越

状○含状 柳川重信 ○弁慶状ヨリ末 玉蘭齋貞秀」「浄書 一貫齋金交」「弘化二丙午年初開板 安政四丁巳年未増補 東都書肆 平林収文堂寿梓」とあり、江戸の出版と分類した。裏表紙裏の最終行に「本所松坂町二丁目収文堂 平林庄口(虫食いで判読不明)」と刊行した書肆の記載がある。他に関わった書肆の名前7名も列挙して記載がみえる。「和泉屋市兵衛 藤岡屋慶次郎 □品屋東蔵 □子屋平兵衛 菊屋幸三郎 山崎屋清七 森屋治兵衛」。

『国書総目録』『古典籍総合目録』に類似の資料は存在せず、『往来物解題辞典』にも見られない。「古状揃」の古い形態は大本といわれ、流布本でない小型の懐中版である点が注目される。

#### ⑥新撰雛形 全四冊

〈資料番号〉173

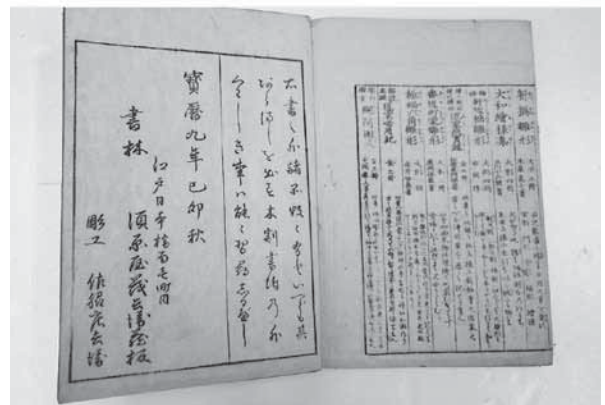
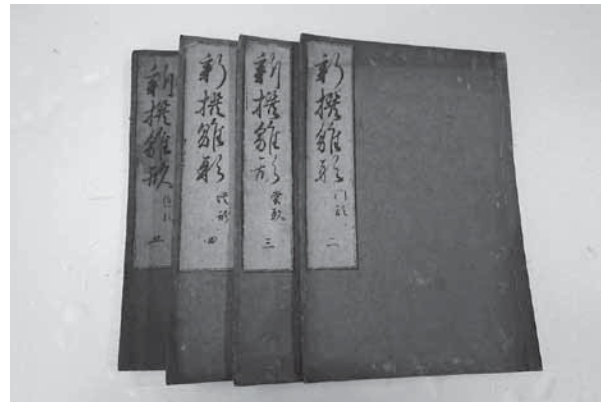
〈表紙〉薄青色

〈形状〉横18.0cm 縦25.8cm 懐中版

〈丁数〉一卷全25丁、三巻全25丁、四巻全18丁、五巻32丁

〈出版〉江戸

〈分類〉産業科往来



⑥『新撰雛形 二～五』(表紙・五巻32丁裏)

『国書総目録 第4巻』(714頁)に「新撰大工雛形」名で記載あり、「5巻5冊」本とある。本資料は、うち4冊に該当する。『国書総目録』によれば、別名「新撰雛形」、種類「木工」、著者「木暮甚七」、成立「宝暦八年序」、版本は「宝暦九年」が、内閣、京大、教大、早大など12か所、宝暦十年版が国会、宝暦十四年版が京大に所蔵。本資料は、「宝暦九年版」である。大工職人向けの産業科往来と分類したが、『往来物解題辞典』にも記載はない。

題箋があり、「新撰雛形 門形 二」「新撰雛形 堂形 三」「新撰雛形 塔形 四」「新撰雛形 模様 五」。二巻1丁表に「新撰大工雛形巻二目録」「平口間山門 唐棟門 (以下略)」とあり、門の形を説明した巻であることがわかる。内題は「新撰大工雛形」で、一巻が欠けている資料と知られる。角(丁の中央)に1丁目は「大工雛形巻二 目録」、2丁目は「大工雛形巻二 ○一」と丁数(今でいう页数)の記載がある。三巻は、1丁表に「新撰大工雛形巻三目録」「東金堂 三間四面堂 大庫裡 (以下略)」とあり、「堂」の形を説明した巻。全25丁。

四巻は、1丁表に「新撰大工雛形巻四目録」「寶塔 小塔 大塔 (以下略)」とあり、「塔」の形を説明した巻。全18丁。五巻は、1丁目表はそれまでの巻にある目録部分がなく、角の丁数記載も1丁目からである。瓦のデザインが示された巻で、全32丁。32丁表に「大工雛形書目録 江戸日本橋通南一丁目 須原屋茂平衛蔵板」とあり、「大工雛形 横本五冊 宮形 武家形 柵形 数寄屋形 小坪規口 同六冊 小坪規口一冊増」「大工手鑑 大本四冊 間尺之大事 釘初柱立大事 棟札地鎮法式 鳥居形品々」ほか32丁裏にわたり、13種の書物を紹介している。

裏表紙裏部分に「宝暦九年巳卯秋 書林 江戸日本橋南壹丁目 須原屋茂平衛蔵板 彫工 佐脇庄兵衛」と確認できる。

#### ⑦古刀銘尽大全 全9冊

〈資料番号〉174

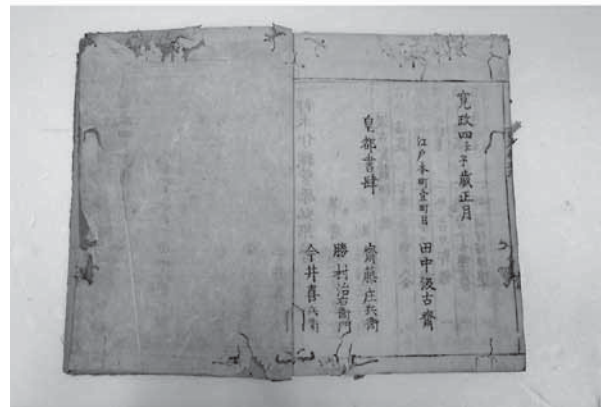
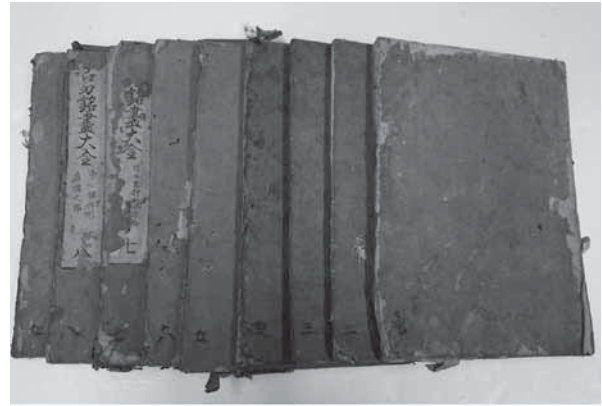
〈表紙〉薄茶色(黄土色)文様入り

〈形状〉横18.0cm 縦26.0cm

〈丁数〉一卷全33丁、二巻全24丁、三巻全36丁、四巻全18丁、五巻17丁、六巻全16丁、七巻全36丁、八巻全33丁、九巻全44丁

〈出版〉江戸

〈分類〉産業科往来



⑦『古刀銘尽大全 一～九』(表紙・九巻44丁裏)

『国書総目録 第3巻』(512頁)に記載あり。「九巻九冊」で種類は「刀剣」、著者は「仰木(菅原)弘邦」、成立は「寛政四年刊」とあり、本資料もこれに該当する。版本は、「寛政四年版」が国会、宮書、東博など24か所、「天保九年版」が天理、「嘉永四年版」が東大史料、「刊年不明」が三か所の所蔵との記載がある。本資料は「寛政四年版」である。九巻9冊がそろっていることでも貴重である。

題箋は、七巻八巻の資料のみ残存し、他のものは題箋が欠落しているが、残存しているものも古さからみて成立当初の題箋と思われる。表紙は、薄茶色(黄土色)文様入り、横18.6cm、縦26.0cmである。一卷1丁表に「古刀銘尽序」とあり、3丁まで序が続く。角書に「古刀巻之一 序一」のように記載が確認できる。その序部分を含めて全33丁。1丁裏に「寛政辛亥のとし」、2丁表に「序」文があり、2丁裏に「目録」があり、壹巻から九巻の内容が記載されている。3丁表に「凡例」が続く。鍛冶職人に対する教科書的な文献として産業科往来に分類した。

二巻は、全24丁。二巻三巻は角書きがない。二巻は全36丁。四巻は全18丁。角書きに「古刀巻之四一」のようにある。五巻は全17丁で角書きがあり、六巻は全16丁で角書きがある。七巻は題箋が「口口銘尽

大全 焼刃忠押形口彫物 七」とあり、全36丁。角書もある。八巻は題箋が「古刀銘尽大全 中心銘押形東国之部 八」とあり、全33丁。角書もある。九巻は全44丁。43丁裏に「寛政辛亥冬十一月 濃州刺史坂上是村」、44丁表に「仰木伊織菅原弘邦著」「彫刻丹羽庄兵衛」「汲古堂蔵版目録」が列挙され、「古今銘尽 七巻 同大全懐本 三巻」ほか八冊の書物が紹介されている。44丁裏最終部分に「寛政四 壬子歳正月 江戸本町壺丁目 田中汲古齋 皇都書肆 齋藤庄兵衛 勝村治右衛門 今井喜兵衛」とあり、江戸の出版と知られる。

#### 4. まとめにかえて

新潟県の長岡市立中央図書館文書資料室の目録を参考に調査し、「往来物」に分類できる近世期版本の該当資料を選別した。その結果、「古志郡浦瀬村斯道館資料」に7本、「横山家文書」に10本、計17本の近世期版本の往来物資料の所在と書誌を確認した。

本稿においては、「古志郡浦瀬村斯道館資料」の7本について画像とともに紹介したが、新潟中越大地震の被災資料の活用事例としても、貴重な報告といえるだろう。調査結果としては、目的別の分類では、教科書往来が1本、消息科往来が3本、歴史科往来が1本、産業科往来が2本であり、様々な分野の資料が所在し、その7本すべてが江戸の出版であることを確認した。補足であるが、写本としては、語彙科往来1本、消息科往来1本の所在も確認した。

地域の教育事情の一端として、近世期の往来物資料の使用実態をうかがい知ることができたが、江戸出版の文献資料に占められていた点も興味深い調査結果といえよう。「横山家文書」の該当資料の調査結果を含め、今後の研究と合わせて、地域の教育と文化的背景の解明へとつなげたいと思う。

#### 注

- 1) 拙稿「弘前市立図書館所蔵「往来物」について—関西文化との関係から—」(『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第1輯』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2006年3月)、拙稿「弘前市立図書館蔵『都花月名所』考—近世期の京都観—」(『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第3輯』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2007年3月)、拙稿「往来物の「女ことば」について」(『関西文化研究叢書 10巻』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2008年11月)、拙稿「近世期における「御所ことば」の記載について—東京大学総合図書館蔵「往来

物分類集成」からの報告—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第104号、2010年10月)、拙稿「国語資料としての『都花月名所』—江戸時代後期における漢字表記と振り仮名—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第106号、2011年10月)、拙稿「『南都名所記』についての一考察—山形県立博物館教育資料館所蔵本の資料性—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第110号、2013年10月)等参照。

- 2) 拙稿「岩手県立図書館所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第100号、2008年10月)、拙稿「八戸市立図書館 旧遠山家所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第102号、2009年10月)、拙稿「秋田県立図書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第103号、2010年3月)、拙稿「酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料—目的と出版地からの分類分析—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第107号、2012年3月)、拙稿「山形県立博物館教育資料館所蔵の往来物資料—目的別分類からの考察—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第108号、2012年10月)、拙稿「山形における江戸時代の書籍流通について—往来物資料の出版地域からの検討—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第109号、2013年3月)、拙稿「秋田県立図書館所蔵往来物の出版地域に関する一考察—弘前・酒田・山形との比較検討—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第111号、2014年3月)等参照。
- 3) 拙稿「富山県立公文書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第114号、2015年10月)、拙稿「高岡市立中央図書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第116号、2016年3月)参照。
- 4) 拙稿「長岡市立中央図書館文書資料室所蔵の往来物について—横山家文書からの報告—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第118号、2017年10月)参照。
- 5) 長岡市立中央図書館文書資料室編『長岡市史双書 No48 新潟県中越大地震と資料保存 (1)』(有限会社トヤマ写真製版所、2009年)、長岡市立中央図書館文書資料室編『長岡市史双書 No49 新潟県中越大地震と資料保存 (2)』(有限会社トヤマ写真製版所、2010年)参照。
- 6) 分類については、石川松太郎著『往来物の成立と展開』(雄松堂、1988年)、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 解題編』(大空社、2001年)、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 図版編』(大空社、2001年)を参考とした。
- 7) 長友千代治著『江戸時代の図書流通』(思文閣出版、2002年)、鈴木俊幸著『江戸時代の読書熱』(平凡社、2007年)、市川寛明・石山秀和著『江戸の学び』(河出書房新社、2006年)等参照。鈴木俊幸氏のご研究によれば「寛政期(1789~1801)を境にして、知と情報のありようが大きく変化していくように思われる。」(『江戸時代の読書熱』(平凡社、2007年)17頁参照)という。
- 8) 『国書総目録 第1~9巻』(岩波書店、1963~1976年)参照。

- 9) 『古典籍総合目録 第1～3巻』(岩波書店、1990年) 参照。
- 10) 岩下庄之助「目崎精松と斯道館(一)」(『長岡郷土史』第19号、1981年)、岩下庄之助「目崎精松と斯道館(二)」(『長岡郷土史』第21号、1983年)、佐々木一祿「家郷の育英事業に全生涯を捧げられた 昌武・目崎精松先生のこと」(『長岡郷土史』第20号、1982年)等 参照。

**【付記】**

貴重な文献資料の閲覧や撮影、ならびに掲載許可をいただくなど、研究にご協力とご助力をいただいた、新潟長岡市立中央図書館文書資料室の関係者各位に心より感謝申し上げます。「斯道館資料」所蔵者(委託者)の樋口一氏には、拙稿をご確認いただき、研究と資料掲載を快くご許可いただきました。文書資料室長の田中洋史氏には、関係の研究論文等についてご教示いただくなど大変お世話になりました。記して謝意を表します。

本稿は、科学研究費助成事業 JSPS KAKENHI (基盤研究(C) 課題番号15K02555) の助成を受けた研究成果の一部です。

(2017.12. 8 受理)